

『草堂詩餘』の来源にかかわる一考察——辛棄疾詞の分析から——

藤原 祐子

はじめに

『草堂詩餘』は、南宋末の成立にかかると思われる詞選集である。最も早く『草堂詩餘』の存在に言及するのは、王楙の『野客叢書』であり、これには嘉泰二年（一二〇二）の自序がある。^①また瑞平年間（一二三四～一二三六）に浙西提挙をしていたといわれる陳振孫の藏書録『直齋書錄解題』に「『草堂詩餘』二卷」が著録されている。王楙と陳振孫のいう『草堂詩餘』が同一のものであるかどうか不明だが、少なくとも十三世紀の初頭にはすでに『草堂詩餘』と名付けられた詞選集（これを仮に祖本『草堂詩餘』と呼びたい）が存在していたことになる。

ところで、現存する最古の『草堂詩餘』（元・至正三年（一三四三）刊本）には、先行する様々な書物からの借用や引用を諸処に見出すことができる。それら書物の中でも特に重要と思われるものに、紹興十八年（一一四八）の自序を持つ胡仔編『苕溪漁隱叢話』、嘉定四年（一二二二）の劉必欽による序文を持つ陳元龍集註『詳註周美成詞片玉集』、淳祐九年（一二四八）の自序を持つ黃昇編『花庵詞選』等がある。^②このうち『苕溪漁隱叢話』は群を抜いて早

く十二世紀半ばに成立しているが、『片玉集』や『花庵詞選』は『野客叢書』以後に成った書である。とすれば、『野客叢書』の言及する祖本『草堂詩餘』がそれらを参照できたはずがない。このことは、祖本と現存の『草堂詩餘』(以下、単に『草堂詩餘』と呼ぶ場合はすべてこの現存『草堂詩餘』を指す)が「別もの」ないし「改編などによって原型をあまり留めなくなつてしまつたもの」であることを意味するだろう。^③現『草堂詩餘』は、上述の書物すべてが存在した後でなければ成立し得ない。

祖本『草堂詩餘』はすでに失われており、その本来の姿を知ることとはできない。他方、現存する『草堂詩餘』と題された詞選集の刊本は多種多様で、それぞれの刊本系統も複雑なため、やはりその全体像を把握することは困難を極める。筆者はこれまで、『草堂詩餘』の刊本の中でもより古い形態と考えられる分類編次本について考察してきており、それがどのような性格を持った刊本であり、どのように使われたのかということについては、ある程度明らかにできたのではないかと思う。^④そこで本稿では、そもそもその『草堂詩餘』がどこから作品を集めてきて成立したのかという問題について、南宋を代表する詞人辛棄疾の詞を材料に、現存する資料情報からわかる範囲での考察を加えてみたい。辛棄疾を採りあげるのは、彼が『草堂詩餘』に最も多く作品が収録される南宋詞人であるだけでなく、次節において述べるように南宋末までに別集が世に行われていたことが知られており、また『草堂詩餘』とほぼ同時期の刊本が現存しているため、テキストの校勘を行うことが可能な人物だからである。

一、『草堂詩餘』と辛棄疾別集

まず、辛棄疾とその別集の刊本についてみておくことにしよう。辛棄疾、字は幼安、号は稼軒。紹興十年(一一四〇)、

当時金朝支配下にあった山東省済南で生まれている。紹興三十一年に金朝打倒を目指して決起した耿京の軍に参加し、同三十二年に耿京の命を奉じて南宋に帰服。その後六十八歳で卒するまで、一官僚として南宋に仕えて一生を送った^⑤。辛棄疾は当時の文人としては極めて異例なことに、文学活動は詞作に専念している。現存する詞は六百首を超えるが、両宋を通じて彼ほど多くの詞を残す者はいない^⑥。『宋史』『芸文志』『集部』が載せる別集が基本的に詩文集である中で、辛棄疾については「辛棄疾長短句十二卷」が著録されるのは、その際だったあらわれと言えるだろう。

しかも、辛棄疾の別集として世に行われていたのは、『宋史』に見える「長短句十二卷」だけではない。実は、辛棄疾詞には宋末までに少なくとも二種類の刊本が存在していた。その二種類について、南宋・陳振孫『直齋書錄解題』は次のようにいう^⑦。

稼軒詞四卷。宝謨閣待制済南辛棄疾幼安撰。信州本十二卷、卷視長沙為多。

稼軒詞四卷。宝謨閣待制済南辛棄疾幼安撰。信州本十二卷、卷は長沙に視^{くら}べて多しと為す。

辛棄疾の別集には長沙で刊行された四卷本と、信州で刊行された十二卷本があった。『宋史』が著録するのがすなわち陳振孫のいう「信州本」なのである。この二種類は巻数のみならず、名称も、四卷本が『稼軒詞』（巻は甲乙丙丁をもって数えられる）、十二卷本が『稼軒長短句』と異なっている（以下、それぞれ『稼軒詞』『長短句』と略称する）。ともに宋本は佚しているが、元明時代の「宋本」をもとにしたとされる刊本・鈔本が現存する^⑧。

このうち、『稼軒詞』は辛棄疾の在世中に門人の范開が編纂したもので、晩年の作品は収録されていない。巻頭

に附された淳熙戊申（一一八八）の紀年を持つ范開の序文は、自らが編んだ『稼軒詞』について次のように述べる。

開久従公游。其殘膏賸馥、得所需焉為多。因暇日裒集冥搜才逾百首。皆親得於公者。以近時流布於海内者率贗本、吾為此懼。故不敢獨闕、將以祛伝者之惑焉。

開は久しく公に従いて游す。其の殘膏賸馥、需焉する所を得ること多しと為す。因りて暇日裒集冥搜しいさうさ才く百首を逾ゆ。皆な親ら公に得たる者なり。近時海内に流布するは率ね贗本なるを以て、吾れ此が為に懼る。故に敢えて独り闕ささず、將に以て伝者の惑いを祛わん。

この序文で興味深いのは、「其殘膏賸馥、得所需焉為多」の一文ではあるまいか。范開は自身が基づいたテキストはすべて「所需焉」、すなわち辛棄疾から直接与えられた「親筆」だという。とすれば、「近時に海内に流布するは率ね贗本」という「贗本」は「親筆によらざるもの」の意に他あるまい。つまり、范開は「書面」以外による詞のテキストの伝承を恐らくまったく発想していないのである。この事が持つ意味は、些細なように見えて実は非常に大きいだろう。

対する『長短句』は辛棄疾卒後の刊行にかかるとされ、晩年の作も含めた作品を詞牌別に整理して収録する。『稼軒詞』と比較してみると、詞の本文にはテキストの改変が多く見られ、また題序もしばしば異なる。

『稼軒詞』と『長短句』のテキストの違いを実際に見てみよう。次に挙げるのは辛棄疾の代表作の一つ、【祝英台近】である。小題はいずれも「晚春」に作る。

宝釵分、桃葉渡。煙柳暗南浦。怕上層樓、十日九風雨。斷腸片片飛紅、都無人管、倩誰喚、流鶯声住。鬢邊覩。

試把花卜心期、纔簪又重數。羅帳灯昏、鳴咽夢中語。是他春帶愁來、春歸何處。却不解、將愁歸去。

〔稼軒詞〕

宝釵分、桃葉渡。煙柳暗南浦。怕上層樓、十日九風雨。斷腸片片飛紅、都無人管、更誰勸、啼鶯声住。鬢邊覩。

試把花卜歸期、纔簪又重數。羅帳灯昏、哽咽夢中語。是他春帶愁來、春歸何處。却不解、帶將愁去。

〔長短句〕

傍線を施した部分が異同のある箇所である。微妙に意味内容の異なるこれだけの異同が、単に音や字形の類似によつて生じたものとは考えにくいだろう。その他同様の例を、右に倣つて『稼軒詞』『長短句』の順に、該当箇所のみいくつか以下に示す。

●誰把香奩收宝鏡、雲錦紅涵湖碧。

誰把香奩收宝鏡、雲錦周遭紅碧。

〔念奴嬌〕「西湖和人韻」

●長安故人問我、道尋常泥酒只依然。

長安故人問我、道愁腸殢酒只依然。

〔木蘭花慢〕^⑨「滁州送范倅」

●是夢裏尋常行過、江南江北。

還記得夢中行過、江南江北。

〔滿江紅〕「江行和楊濟翁韻」^⑩

小題が異なる例も挙げておこう。

● 為韓南澗尚書寿甲辰歲

甲辰歲寿韓南澗尚書

〔水龍吟（渡江天馬南來）〕

● 旅次登樓作

滁州作奠枕樓和李清宇韻

〔声声慢（征埃成陣）〕

このように、『稼軒詞』と『長短句』は収録作品数の多寡はもちろんだが、詞の小題や本文といったテキストそのものにも大小様々な多くの異同がある。極端な言い方をすれば、辛棄疾の別集には異なった二種類のテキスト系統が存在するのである。

さて、この二種類の異なったテキストを持つ刊本はともに『直齋書錄解題』に記録が見える。つまり、現『草堂詩餘』の成立以前にすでに世に行われていたということになる。『草堂詩餘』の編者は周邦彦や蘇軾の詞を収録する際、それぞれの註付きの別集を参照していたと考えられるのだが、^⑪辛棄疾についてはどうか。

『草堂詩餘』は辛棄疾の詞を全部で十首収録する。収録順に列挙すると、〔祝英台近（宝釵分）〕〔醉江月（野棠花落）〕〔摸魚兒（更能消）〕〔鷓鴣天（着意尋春懶便回）〕〔蝶恋花（誰向椒盤簪綵勝）〕〔金菊對芙蓉（遠水生光）〕〔醉江月（晚風吹雨）〕〔沁園春（三逕初成）〕〔水龍吟（渡江天馬南來）〕〔千秋歲（塞垣秋草）〕となる。このうち〔金菊對芙蓉〕一首は『草堂詩餘』のみが収録する作品であるため、別集との比較が可能なのは残りの九首である。

作品を見てみよう。まず、『草堂詩餘』のテキストを示す。^⑫

【酹江月】「春恨」

野棠花落。又匆匆過了、清明時節。剗地東風欺客夢、一枕銀屏寒怯。曲岸持觴、垂楊立馬、此地曾經別。樓空人去、
旧遊飛燕歸說。聞道綺陌東頭、行人曾見、簾底纖纖月。旧恨春江流不尽、新恨雲山千疊。料得明朝、尊前重見、
鏡裏花難折。也應驚問、近來多少華髮。

次に別集であるが、二種類とも引くのは煩瑣に過ぎるので、「親筆」によるという『稼軒詞』のテキストのみを挙げ、『長短句』との間に異同がある場合は（ ）で示すことにする。

【念奴嬌】「書東流村壁」

野棠花落。又匆匆過了、清明時節。剗地東風欺客夢、一夜雲屏寒怯。曲岸持觴、垂楊繫馬、此地曾輕別。樓空人去、
旧遊飛燕能說。聞道綺陌東頭、行人長見（曾見）、簾底纖纖月。旧恨春江流未斷（流不斷）、新恨雲山千疊。
料得明朝、樽前重見、鏡裏花難折。也應驚問、近來多少華髮。

まず気がつくのは、同じ作品でありながら詞牌名が異なっている、ということであろう。【酹江月】は【念奴嬌】の別名であり、蘇軾【念奴嬌】「赤壁懷古」詞の末尾に「人間如夢、一尊還酹江月」とあるところから採られたものである。単に別名といえはそれまでだが、『草堂詩餘』は他の作者の作品はすべて【念奴嬌】としているのだから、辛棄疾の作品のみ【酹江月】とすることは何らかの理由があると見るべきではないだろうか。ちなみにいえば、

辛棄疾のこの詞の最後は恐らく蘇軾詞を強く意識しており、【醉江月】という別名を詞牌として掲げるのは、ある意味卓見といえるかもしれない。

また、小題として附される内容も異なる。『草堂詩餘』は「春恨」という作品の内容を極めて表面的にかつ大雑把にまとめたものの、『稼軒詞』には「東流村壁に題す」という、詞を創作した場所を具体的に示すものを、それぞれ小題としているのである。実はこのような現象は他の詞でも見出すことができる。たとえば【摸魚兒】。『稼軒詞』が「淳熙己亥、自湖北漕移湖南同官、王正之置酒小山亭、為賦（淳熙己亥、湖北漕より湖南同官に移る。王正之酒を小山亭に置く。為に賦す）」と、制作年をはじめとする詞の作られた環境に関する詳細な説明を小題とするのに対し、『草堂詩餘』のそれは「春晚」である。^⑬ また【沁園春】は、『稼軒詞』が「帶湖新居將成（帶湖の新居將に成らんとす）」であるのに対して、『草堂詩餘』は「退閑」とする。別集は詞が作られた環境、『草堂詩餘』は内容の要約を小題として附けようとする傾向があるといえるだろう。

この『草堂詩餘』が附す小題の傾向は、その「分類」という体例とおそらく最も大きく関係している。作品を主題によつて分類する場合、作品が創作された情況よりも内容をわかりやすく要約して提示した小題の方が好まれるのが自然であろう。また、ここに別集と詞選集の作者や作品保存に対する意識の差を見ることが、あるいは可能かもしれない。

本文に目を移そう。

●一枕銀屏寒怯。曲岸持觴、垂楊立馬、此地曾經別。
（『草堂詩餘』）

一夜雲屏寒怯。曲岸持觴、垂楊繫馬、此地曾經別。
（『稼軒詞』）

●旧恨春江流不尽、新恨雲山千疊。（『草堂詩餘』）

旧恨春江流未斷（流不斷）、新恨雲山千疊。（『稼軒詞』）

音の類似（銀 yin—雲 yun、立 li—繫 xi、意味の類似（一枕一夜、流不尽—流未斷—流不斷）、音と字形両方の類似（經 jing—輕 qing）等が、異同が生じた原因として挙げることができる。しかし、特に一つ目の「曾經—別」「曾—輕別」は、ただ一字が異なるだけとはいえず、それで句作りや内容そのものが変わってしまったため、軽視することはできない。しかも、この場合注意しなければならないのは、先に引いた『稼軒詞』范開序文が辛棄疾の親筆のテキストによって編んだと述べるように、これら詞のテキストは当時すでに文字化されたものによって伝承された可能性が高いことである。そうだとすれば、「音の類似」による異同は、少なくともテキストの伝承過程においては生じ得ない。

他の例も見えておこう。『草堂詩餘』はもう一首【**酹江月**】を収録する。

【**酹江月**】「西湖和韻」

晚風吹雨、戰新荷声乱、明珠蒼壁。誰把香奩收宝鏡、雲錦周遭紅碧。飛鳥翻空、遊魚吹浪、慣聽笙歌席。坐中豪氣、看君一飲千石。遙想処士風流、鶴隨人去、已作飛仙客。茅舍竹籬今在否、松竹已非疇昔。欲望当年、望湖楼下、水与雲寬窄。醉中休問、斷腸桃葉消息。（『草堂詩餘』）

【**念奴嬌**】「西湖和人韻」

晚風吹雨、戰新荷声乱、明珠蒼壁。誰把香奩收宝鏡、雲錦紅涵湖碧（雲錦周遭紅碧）。飛鳥翻空、遊魚吹浪、慣

趁笙歌席。坐中豪氣、看公（看君）一飲千石。

遙想處士風流、鶴隨人去、老作飛仙伯（已作飛仙伯）。茅舍疎

籬今在否、松竹已非疇昔。欲說當年、望湖楼下、水与雲寬窄。醉中休問、斷腸桃葉消息。

（『稼軒詞』）

詞牌名の異同については前にも述べたので繰り返さない。小題は、『稼軒詞』の方に「人」一字が加わっているが、これは『草堂詩餘』が何らかの理由でその一字を脱落させてしまった可能性が高いだろう。本文に見える異同は傍線で示したとおりである。それらの多くが、どちらかがどちらかを参照して生じるような種類のものではないことは注意しておきたい。

ところで、一首目の【酹江月】でもその傾向が見えるのだが、この【酹江月】においても、『草堂詩餘』のテキストは『稼軒詞』と遠く、『長短句』に一致することが多いのに気づくのではないだろうか。もしそれが九首すべての辛棄疾詞にあてはまるとすれば、その原因としてテキストの継承関係を想定することが可能となるかもしれない。しかし、事はそう単純ではないのであって、『稼軒詞』の方が『草堂詩餘』のテキストに一致する場合もある。たとえば先に挙げた【祝英台近】。これを『草堂詩餘』は次のようなテキストで掲載する。

【祝英台近】「春晚」

宝釵分、桃葉渡。煙柳暗南浦。怕上層樓、十日九風雨。斷腸点点飛紅、都無人管、倩誰喚流鶯、聲住。鬢邊覩。試把花卜歸期、纔簪又重數。羅帳燈昏、哽咽夢中語。是他春帶愁來、春歸何處。又不解帶將愁去。

『稼軒詞』は、傍線部をそれぞれ「斷腸片片飛紅」「心期」「嗚咽」「却不解將帶歸去」に作る。では『長短句』の

対応部分がどうかというところ、最初の傍線部と最後の傍線部の「又」を『稼軒詞』と同じ「断腸片片飛紅」「却」に作るほかは、『草堂詩餘』と同じなのだが、『稼軒詞』が『草堂詩餘』と同じに作る前関末の波線部を、『長短句』は却って「更誰勸啼鶯声住」にしているのである。なお、小題は『稼軒詞』『長短句』が同じ「晚春」に作り、『草堂詩餘』の「春晚」とは意味は類似していても異なった表現となっている。以上の異同を一覧にすると、次のようになるだろう。

テキスト	小題	本文				
『草堂』	春晚	断腸点点飛紅	倩誰喚流鶯声住	歸期	哽咽	又不解帶將愁去
『稼軒詞』	晚春	断腸片片飛紅	倩誰喚流鶯声住	心期	鳴咽	却不解將帶歸去
『長短句』	晚春	断腸片片飛紅	更誰勸啼鶯声住	歸期	哽咽	却不解帶將愁去

このようにしてみると、結局『草堂詩餘』のテキストは『稼軒詞』とも『長短句』とも異なっているといわざるを得まい。ということは、『草堂詩餘』は少なくともこの現存の異なった二種類の別集のうちのいずれかを参照して辛棄疾詞を収録したとは考えにくいのである。

だが、范開序文が示唆するように、当時すでに詞テキストの伝承は多く文字資料によって行われていたであろうこと、『草堂詩餘』が収録する幾人かの作品テキストの淵源が先行する註釈書等に求められることを考えた場合、辛棄疾の作品収録にあたっても先行資料があったと考えるのが自然である。つまり、辛棄疾詞には今に伝わる別集の二系統のほかに、『草堂詩餘』が参照した別の文字テキストが存在したのではないか。

では、その第三のテキストがどういうものであったのかを、節を改めて考えてみたい。

二、『草堂詩餘』と『花庵詞選』

『草堂詩餘』は一体どこから辛棄疾詞を収録してきたのだろうか。少なくとも現存する別集であるとは考えられない以上、次の手掛かりとなりうるのは当時の詞選集であろう。南宋期に編まれ、しかもまとまった数の辛棄疾詞を収録する現存の詞選集としては、黄昇の『中興以来絶妙詞選』をまず筆頭に挙げねばなるまい。

『中興以来絶妙詞選』は、同じく黄昇編の『唐宋諸賢絶妙詞選』とあわせて、『花庵詞選』と総称される。これは両書の編者黄昇の号「花庵」から採られた呼び名である。正名の通り、『唐宋諸賢絶妙詞選』は唐五代から南宋初に到るまでの、『中興以来絶妙詞選』には南宋（宋朝の中興）の、それぞれ詞人と作品がほぼ時代順に収録されている。『花庵詞選』は、後代には「詞史」と称されるほど高い評価を得る。¹⁴これには、『花庵詞選』が宋末までに成立した詩の総集や選集に多い、作者ごとに作品を掲載する人物本位の体例を採ること、¹⁵姓と字で記された詞人名の下に註記の形で本名や貫籍・経歴といった情報がいしば附されること、¹⁶この二点の特徴が大きく関わっている。

この『花庵詞選』は、本稿「はじめに」ですでに述べたように、現『草堂詩餘』との密接な関係を想定しうる書物のうちの一つである。そのことは、黄昇が『花庵詞選』の中で著した按語や作者の伝が、「玉林詞選云」「花庵詞客云」等の形で『草堂詩餘』の中に二十則以上引用されていることから明らかと言える。¹⁷また、『草堂詩餘』に収録される詞の半数以上が『花庵詞選』の選択と一致していることも、両者の密接な関係を暗示しているよう。ところが、こういった詞話や詞人の共有は指摘されていながら、両者の具体的な作品のテキストについては、これまでほとんど検討されてこなかったように思われる。『草堂詩餘』の源流を探るために、本節では作品のテキストに着

目して『花庵詞選』との比較考察を行つてみたい。

『花庵詞選』は『中興以来絶妙詞選』の卷三に辛棄疾詞を収録する。作品数はすべて四十二首。『花庵詞選』全体を見渡したとき、この数は劉克莊とならんで第一位である。辛棄疾は全作品数が約六百首と、両宋を通じて最も多作な詞人であることも関係していようが、それでも相対的に見て黄昇が辛棄疾を重視していたのはおそらく疑いを容れまい。¹⁸ 対する『草堂詩餘』は前節で挙げたように十首を収録し、そのうち『花庵詞選』と共通するのはやはり【金菊对芙蓉】を除く九首である。

まず、前節で別集とテキスト比較を行つた【祝英台近】を見てみよう。『草堂詩餘』のテキストは別集二系統とは異なつていた。『花庵詞選』とはどうか。¹⁹

【祝英台近】「春晚」

宝釵分、桃葉渡。煙柳暗南浦。怕上層樓、十日九風雨。斷腸点点飛紅、都無人管、倩誰喚流鶯声住。鬢辺覩。
試把花卜歸期、才簪又重數。羅帳灯昏、哽咽夢中語。是他春帶愁來、春歸何處。又不解、帶將愁去。

(『草堂詩餘』)

【祝英台近】「春晚」

宝釵分、桃葉渡。煙柳暗南浦。怕上層樓、十日九風雨。斷腸点点飛紅、都無人管、倩誰喚流鶯声住。鬢辺覩。
試把花卜歸期、才簪又重數。羅帳灯昏、哽咽夢中語。是他春帶愁來、春歸何處。又不解、帶將愁去。

(『花庵詞選』)

前関二句目の「渡」を「度」に作るが、この二字はしばしば通用されるので、特に異同と見なす必要はあるまい。つまり、小題・本文ともに完全に一致するのである。そして本詞のほかに【鷓鴣天】【沁園春】【水龍吟】の三首においても、同様の一致を認めることができる。

また、本文は同じだが小題のみ異なる例もある。たとえば【蝶恋花】の小題を『草堂詩餘』は「元日立春」に作るのに対し、『花庵詞選』は「戊申元日立春」、【千秋歲】は『草堂詩餘』が「寿史致道」、『花庵詞選』が「建康寿史致道」に作る。いずれも、『花庵詞選』の小題から干支と地名を省いたものが『草堂詩餘』の小題、ということができる。『草堂詩餘』の方が具体性・個性という点で希薄になっていることは、注意しておきたい。もう一つの【摸魚兒】は、『草堂詩餘』が「春晚」とするのに対して『花庵詞選』が「暮春」に作っており、前二首とは異なっており、類似の内容を別の言葉で表したものとなっている。

では、『草堂詩餘』が【酹江月】という詞牌名で収録していた残りの二首についてはどうか。まず、『花庵詞選』はこの二首を『草堂詩餘』と同じ【酹江月】という名で収録している。次いで小題を見ると、『草堂詩餘』が「春恨」としていた方は『花庵詞選』も「春恨」に作り、『草堂詩餘』が「西湖和韻」としていた方は『花庵詞選』は「西湖和人韻」とする。最後に本文については、前者が「帰説」を「能説」に、後者が「却望」を「却説」に作るのみで、ともに一箇所の異同にとどまっている。

以上を総合すると、ごくわずかな違いは見いだせるにしろ、『草堂詩餘』と『花庵詞選』とはほとんど同じテキストとすることができるだろう。これらを別集のそれと比較してみるとどうであろうか。まず、『草堂詩餘』と『花庵詞選』が完全に一致するもののうち、すでに別集との比較を行った【祝英台近】を除く三首から見よう。

【鷓鴣天】 小題「春行即事」（『草堂』『花庵』）

「鵝湖歸、病起作（鵝湖より歸り、病起こりて作る）」（別集二種）

【沁園春】 小題「退閑」（『草堂』『花庵』）

「帶湖新居將成（帶湖の新居將に成らんとす）」（別集二種）、

本文前闕九句目「要早」（『草堂』『花庵』）／「貴早」（別集二種）

【水龍吟】 小題「壽韓南澗（韓南澗を壽す）」（『草堂』『花庵』）

「為韓南澗尚書壽甲辰歲（韓南澗尚書の為に甲辰の歲に壽す）」（『稼軒詞』）

「甲辰歲壽韓南澗尚書（甲辰の歲韓南澗尚書を壽す）」（『長短句』）

本文前闕末句「君知否」（『草堂』『花庵』『稼軒詞』）／「公知否」（『長短句』）

【水龍吟】は別集の題から干支を省略すれば『草堂詩餘』『花庵詞選』の題となり、また【鷓鴣天】【沁園春】の両者の題は、別集のような詞作環境の提示ではなく内容の要約となっている。これが前節で見た傾向と同じであることは言うまでもあるまい。

次に、小題に異なるある三首。

テキスト	【蝶恋花】小題		【千秋歲】小題		【摸魚兒】小題
『草堂』	元日立春		寿史致道		春晚
『花庵』	戊申元日立春		建康寿史致道		暮春
『稼軒詞』	戊申元日立春席間作		為金陵史致道留守		淳熙己亥、自湖北漕移湖南同官、王正之置酒小山亭、為賦

『長短句』	元日立春	金陵寿史帥致道、時有 版築役	淳熙己亥、自湖北漕移湖南同官、 王正之置酒小山亭、為賦
-------	------	-------------------	--------------------------------

『草堂詩餘』と『花庵詞選』は確かに異なっているが、別集と比較すればその違いははるかに些細と言える。またこの三首は、本文のテキストについても、別集との間にわずかながら異同を確認できる。

【蝶恋花】 前闋末句「為花長抱新春恨」(『草堂』『花庵』)／「為花長把新春恨」(別集二種)

【千秋歲】 後闋五句目「從容帷幄裏」(『草堂』『花庵』)／「從容帷幄去」(別集二種)

【摸魚兒】 前闋四句目「長怕」(『草堂』『花庵』『長短句』)／「長恨」(『稼軒詞』)

前闋八句目「無歸路」(『草堂』『花庵』『長短句』)／「迷歸路」(『稼軒詞』)

後闋十句目「危欄」(『草堂』『花庵』『長短句』)／「危樓」(『稼軒詞』)

最後に、『草堂詩餘』と『花庵詞選』が本文にも異同を持っていた【醉江月】二首。それぞれのテキスト間の異同を一覧にすると、次のようになる。

【一首目】

テキスト	詞牌名	小題	本文					
草堂	醉江月	春恨	一枕銀屏	立馬	曾經別	歸說	曾見	流不尽
花庵	醉江月	春恨	一枕銀屏	立馬	曾經別	能說	曾見	流不尽
稼軒詞	念奴嬌	書東流村壁	一夜雲屏	繫馬	曾經別	能說	長見	流未斷
長短句	念奴嬌	書東流村壁	一夜雲屏	繫馬	曾經別	能說	曾見	流不斷

【二首目】（詞牌名は同右）

テキスト		小題	本文						
草堂	西湖和韻	周遭紅碧	慣聽	看君	已作	飛仙客	竹籬	却望	
花庵	西湖和人韻	周遭紅碧	慣聽	看君	已作	飛仙客	竹籬	却說	
稼軒詞	西湖和人韻	紅涵湖碧	慣趁	看公	老作	飛仙伯	疎籬	却說	
長短句	西湖和人韻	周遭紅碧	慣趁	看君	已作	飛仙伯	疎籬	却說	

『草堂詩餘』と『花庵詞選』のテキストの間には確かに幾つかの異同を指摘し得るものの、別集との間に見られる異同と比較すれば、やはりほとんど問題にならない程度のものであるのではないだろうか。

以上の比較から、『草堂詩餘』と『花庵詞選』が収録する辛棄疾詞は極めて類似したテキストを持ち、しかもそれは別集二系統とは異なったものであることは明らかであろう。とすれば、次に問題となるのは、ではその『草堂詩餘』と『花庵詞選』が共有する別集とは異なったテキストは、一体どこに淵源を求めるべきものであるのか、ということである。

もし仮に右で見たような現象、つまり小題が別集のそれに比べて具体性を削除したり詞の内容を要約するような短い単語に置き換えられていたり、本文のテキストが現存する別集とは異なるといった現象が、辛棄疾詞だけに見られるのであれば、あるいは辛棄疾には当時『稼軒詞』『長短句』以外にもまた別集が存在し、その別集がこの別のテキストを持っていて、『草堂詩餘』『花庵詞選』はそれを参照して辛詞を収録した、と考えることができる。だが、少なくとも現存する資料の中にそのような別集が存在したという記録や痕跡を見出せない²⁰。そして、実は他の詞人の作品についても、『草堂詩餘』『花庵詞選』と別集の間に、辛棄疾詞と同様の現象を指摘しうるのである。

たとえば張元幹（字は仲宗）²¹の場合を見てみよう。彼の詞集が南宋期に刊行されていたことは、『直齋書錄解題』に「蘆

川詞一卷、三山張元幹仲宗撰」と著録が見えることによつて知られる。²²次に挙げるのは張元幹の代表作の一つ、【滿江紅】である。

【滿江紅】「春晚」

春水連天、桃花浪幾番風惡。雲乍起、遠山遮尽、晚風還作。綠遍芳洲生杜若。楚帆帶雨煙中落。認向來沙嘴共停橈、傷颺泊。寒猶在、衾偏薄。腸欲斷、愁難著。倚蓬窓無寐、引盃孤酌。寒食清明都過了、可憐辜負年時約。想小樓日望歸舟、人如削。

(『草堂詩餘』)

『花庵詞選』はこの詞の小題を「旅思」とするが、本文は『草堂詩餘』と完全に一致する。却つて別集は、「自豫章阻風、呉城山作（豫章より風に阻まる、呉城山にて作る）」と、具体的な詞作環境を小題として附すほか、本文の傍線部をそれぞれ「迷天」「緑卷芳洲」「数帆」「傍向來」「都過却」「最憐輕負」「終日」に作る。この小題の変更が辛棄疾詞【摸魚兒】等とよく似ていることは言うまでもあるまい。また、【石州慢（寒水依痕）】についても、小題・本文ともに『草堂詩餘』は別集よりも『花庵詞選』と近い。²³つまり、彼の詞も辛棄疾詞と同様に『草堂詩餘』と『花庵詞選』とがテキストをほぼ共有し、それは別集とは異なったものである。

もう一人、劉克莊の詞も見ておこう。²⁴本節冒頭で述べたように、『花庵詞選』は劉詞を辛棄疾と同じ四十二首収録する。他方『草堂詩餘』はそのうちたったの一首を収めるにとどまるのだが、そのたった一首のテキストが、やはり辛・張詞と同じ傾向を示していることには注意すべきであろう。異同の集中している前半のみを以下に示す。

【賀新郎】

深院榴花吐。画簾開綵衣紈扇、午風清暑。兒女紛紛新結束、時樣釵符艾虎。早已有游人觀渡。老大逢場慵作戲、任白頭年少爭旗鼓。溪雨急、浪花舞。

『花庵詞選』と別集はともに、この詞の小題を「端午」とする。『草堂詩餘』には小題はないが、これを後集卷上「節序」「端午」の類目中に収めていることからすれば、本詞の理解は共有されていたのであろう。ところが本文に目を移すと、『花庵詞選』が『草堂詩餘』と完全に一致するのに対し、別集は傍線部を「練衣紈扇」「夸結束」「新様」「任陌頭」に作る。

このように、辛棄疾詞以外でも『草堂詩餘』と『花庵詞選』はそのテキストに一致を見、しかもそれは各人の別集が持つテキストとは大きく異なっていることが多い。作品の重複具合や詞話として引用される黄昇の按語の多さから見ても、両者の密接な関係は容易に推測できる、では、『草堂詩餘』は直接『花庵詞選』を参照して編纂されたのだろうか。

答えは恐らく否である。第一に、『花庵詞選』と『草堂詩餘』のテキストは、書写の過程で誤られたり脱落した可能性は否定できないにしろ、完全に同じではない。これは、本節で挙げた幾つかの例からも明らかであろう。第二に、詞話として『草堂詩餘』が引用する『花庵詞選』の按語や小伝がしばしば形を変えている。たとえば次の一文をみてみよう。

玉林詞選云、公東都故老、及見中興之盛者。詞多感慨。庚寅春奉使過京師作【金人捧露盤】【憶秦娥】等曲、

惻然有黍離之悲。如邯鄲道上望叢台有感作【憶秦娥】云、「…（本文略）…」亦有感慨、故併録之。

これは、『草堂詩餘』前集卷上が収録する曾純甫（名は覲）【金人捧露盤（記神京）】に附された詞話である。「玉林詞選」とはすなわち『花庵詞選』のこと（玉林は黃昇の号）。『花庵詞選』は『中興以来絶妙詞選』卷一に曾純甫の詞十四首を収め、そのうち第一首目がこの【金人捧露盤】なのだが、そこに上のような詞話が附されてはいない。実は波線を引いた部分は曾純甫の名前の下に著された小伝の一部である。傍線部は順に【金人捧露盤】と曾詞の第三首目として引かれている【憶秦娥】小題、そして【憶秦娥】の本文も丸ごと詞話中に組み込まれてしまっている。つまり、たしかに『花庵詞選』中に『草堂詩餘』が附す詞話のすべての要素は揃っているのだが、それらが組み合わされ、置き換えられ、また処処に補足の文字が加えられ、最後は「亦有感慨、故併録之（亦た感慨有り、故に併せて之を録す）」という編者の言葉らしき語によって締めくくられるのである。

『草堂詩餘』の引用する詞話は、多少の文字の異同はあれ、その多くが元になった書物から丸ごと移植されたものである。ところが『花庵詞選』に対しては、しばしばこういった一種の「操作」が行われた形跡がある。『草堂詩餘』全体の性格から見た場合、この「操作」は独自に行われたものというよりは、むしろすでにそういう形に操作されたものがあって、『草堂詩餘』はそれを流用したと考えるのが自然であろう。

そして第三に、『草堂詩餘』は収録作品とそのテキストが『花庵詞選』とかなりの一致をみせるにもかかわらず、『花庵詞選』が収録しない詞も収録することがある。本稿で採り上げた辛棄疾についてみれば、十首中九首までが一致するが、残りの一首【金菊對芙蓉】は『草堂詩餘』のみが保存する作品となっている。また、前稿で採り上げた柳永にも、『花庵詞選』と収録の重ならない作品が複数存在している。²⁵⁾

これらの事実から浮かびあがるのは、『花庵詞選』と『草堂詩餘』の間には更に別の「詞選集」が存在していた可能性であろう。しかも、その詞選集も両者と同じテキスト系統を持つていなければならない。これまで、『草堂詩餘』はそのテキストの杜撰さを時に指摘されてきた²⁶。確かに別集のテキストを是とし、総集や選集を編む場合には最も良いテキストを用いるべきであると考えらるならば、『草堂詩餘』は極めて「杜撰」な詞選集ということになるだろう。だが、その別集との間にあるテキストの異同は、本当に『草堂詩餘』編者による「杜撰」によって生み出されたものだったのか。もしそうだとすれば、『草堂詩餘』のテキストの多くが『花庵詞選』と共有されるものであること、さらに両者の他にもまだ同じテキスト系統を持った詞選集があったと推測されることは、どのように説明すればよいのか。結局のところ、『草堂詩餘』のテキストは別集の系統から外れた「杜撰」なものとして捉えるよりも、『花庵詞選』等とともに別集とは別の「流れ」の中に位置するものと捉える方が、むしろ実情に近いのではないだろうか。

では、『花庵詞選』『草堂詩餘』等が共有する別集とは異なった「流れ」とは何か。それを考える手掛かりの一つとなるのは、黄昇自身が著した『花庵詞選』序文である。

長短句始於唐、盛於宋。唐詞具載花間集、宋詞多見於曾端伯所編、而復雅一集又兼采唐宋迄於宣和之季、凡四千三百余首。吁、亦備矣。況中興以來、作者繼出、及乎近世人各有詞、詞各有体、知之而未見、見之而未尽者、不勝算也。暇日哀集得數百家、名之曰絶妙詞選。佳詞豈能尽録、亦嘗鼎一臠而已。²⁷

長短句は唐に始まり、宋に盛んなり。唐詞は具さに花間集に載り、宋詞は多く曾端伯の編する所に見え、而して復雅の一集は又た兼ねて唐宋を采りて宣和の季に迄^{およ}び、凡て四千三百余首なり。吁、^あ亦た備われるかな。

況んや中興以来、作者継出し、近世に及ぶや人に各おの詞有り、詞に各おの体有りて、之を知りて未だ見ず、之を見て未だ尽きざる者は、算うるに勝えざるなり。暇日哀集して数百家を得、之を名づけて絶妙詞選と曰う。佳詞豈に能く尽く録さんや、亦た鼎の一爨を嘗むるのみ。

この中で黄昇は、彼が選集を編む以前に存在し、おそらく彼自身も目を通したのであろう詞選集として、『花間集』『曾端伯所編』『復雅一集』という三つの名を挙げる。『花間集』は言うまでもなく五代後蜀・趙崇祚によつて編まれた選集であり、唐五代詞の最もまとまったテキストである。宋詞の「曾端伯所編」とは、南宋・曾慥編の『樂府雅詞』（端伯は曾慥の字）を指し、その名の通り歐陽脩をはじめとする北宋の名家の「雅詞」が収録されている。さらに唐宋詞ともに収録するものとして挙げる「復雅一集」は、鯛陽居士なる人物の序と本文の断片のみが様々な書物に引用されて残る『復雅歌詞』と題された詞選集を指すだろう。²⁸『復雅歌詞』は唐五代から北宋末までの約四千三百首を収録する、と黄昇は言う。現存しないため、この集の全体像は確かめようもないが、もしもその数が事実だとすれば、『草堂詩餘』の収録数が四百首に満たず、『花庵詞選』でも全体で千二百余首であるのとは、まるで桁違いの大部の書であったことになる。選集と言うより、北宋末までの詞作の総集とでも称すべきものだったのかもしれない。²⁹

次いで黄昇は、宋の中興、つまり南宋に入ってから、詞人・詞作ともに増加の一途をたどり、すべてを見ることなどできないほどの状況になっていると述べる。そして、それらの中から選び集めて詞選集を編んでみたが、佳詞を網羅できたわけではなく、ほんの一部に過ぎないと弁明するのである。

黄昇が『花庵詞選』を編むに当たって先行する諸詞集から詞を受容し取捨選択したらしいことは注目に値するだ

ろう。しかも、黄昇が序文の中で北宋末までの詞籍として挙げるのがいずれも選集であることは、極めて示唆的ではないだろうか。もちろん当時別集がなかったわけではない。『直齋書錄解題』等南宋期の書目を繰れば、詞の別集が多数収録されている。しかし、黄昇はそういった別集については作者小伝の中でごく稀に存在に言及することがあるに過ぎない。³⁰つまり、黄昇は詞人によつては別集を参考にすることもあったかもしれないが、多くの場合は選集から作品を選んでいたのであるまいか。そして興味深いのは、「はじめに」の部分で述べたように、祖本『草堂詩餘』が『花庵詞選』以前には存在していたと考えられるにもかかわらず、黄昇がそれについては序文の中で一言も触れていないことであろう。黄昇が『草堂詩餘』を知らなかった可能性ももちろんあるが、あるいは当時上述のもの以外に非常に多くの詞選集が存在し、祖本『草堂詩餘』もそれらのうちの一つに過ぎなかったことを意味するかもしれない。

三、小結

最後に、南宋から元代にかけて編まれた書目の著録をもとに、『花庵詞選』や『草堂詩餘』が成立する以前および同時代の詞選集の刊行状況を概観しておく必要があるだろう。

この時期の主な書目としては、先にも何度か言及した陳振孫『直齋書錄解題』のほか、晁公武の『郡齋讀書志』、『宋史』『芸文志』、馬端臨『文獻通考』が挙げられる。このうち、『郡齋讀書志』と『宋史』『芸文志』には、詞の別集は幾つか収録されるものの、選集については詩文のそれが名を連ねるにとどまる。³¹また『文獻通考』には「歌詞類」と題された一卷があるが、その部分は実は『直齋書錄解題』のほぼ引き写しと言つてよい。³²結局、元代までの主な

書目で詞の選集を著録するのは、『直齋書録解題』のみということになる。³³そこで、『直齋書録解題』巻二二が載せる書名とその解題を以下に示す。

『樂府雅詞』三卷 『拾遺』二卷³⁴ 曾慥編。

『復雅歌詞』五十卷 題鯛陽居士序、不著姓名、末卷言宮詞音律頗詳然、多有調而無曲（鯛陽居士序と題す、姓名を著さず、末卷は宮詞音律を言うこと頗る詳然たり、多くは調有りて曲無し）。

『草堂詩餘』二卷

『類分樂章』二十卷

『群公詩餘前後編』二十二卷

『五十大曲』十六卷

『万曲類編』十卷 皆書坊編集者。

『陽春白雪』五卷 趙粹夫編。取草堂詩餘所遺、以及近人之詞（草堂詩餘の遺す所を取り、以って近人の詞に及ぶ）。

これらのうち、『草堂詩餘』を除いて現在なお全体を見ることができるのは、『樂府雅詞』『陽春白雪』の二種類である。そこでまず、この両者について見ておこう。

『樂府雅詞』は南宋・曾慥の編にかかる詞選集で、紹興十六年（一一四六）の自序を持つ。その中で曾慥は、この集に採った作品について次のように述べる。

余所藏名公長短句、哀合成篇、或後或先、非有詮次。多是一家、難分優劣。涉諧謔則去之、名曰『樂府雅詞』。
……凡三十有四家、雖女流亦不廢。³⁵⁾

余の蔵する所の名公の長短句、哀合して篇を成し、或いは後に或いは先にありて、詮次有るに非ず。多くは是れ一家たりて、優劣は分かち難し。諧謔に渉るは則ち之を去る、名づけて『樂府雅詞』と曰う。……凡て三十有四家、女流と雖も亦た廢せず。

「名公」の作品であつて、「諧謔に渉」らないもの。それが曾慥がこの選集を編むに当たつて採つた収録基準であつた。収録される三十四人の中には、李清照のような女流や毛沢民・王履道のような今日では必ずしも有名でない人物が含まれる一方で、柳永や蘇軾・秦觀といった北宋の名家の名は見えない。「名公」といいながらこの偏りが生じた理由は今となつては知りようもないが、あるいは曾慥の詞觀がそのうちの一つであつたかもしれない。『草堂詩餘』と収録が重なる作品もあるものの、テキスト的にはかなりの異同が見られる場合が多い。

次に『陽春白雪』。この選集は編者趙聞礼が生卒年不詳であるだけでなく、当時の序跋も残っていないため、正確な出版年代が分からない。選ばれている作品の年代が淳祐十年（一二五〇）頃を下限としていることからすれば、成立はそこからそれほど降らない時期と考えるのが妥当であろう（これは『花庵詞選』とほぼ同時期³⁶⁾）。収録する作品について、解題には「『草堂詩餘』の遺す所を取る」という。ここに言及される『草堂詩餘』とは、直前に挙げられている『草堂詩餘』のことであろうが、実際に現行の『草堂詩餘』と『陽春白雪』を比較してみると、その重複は十首にも満たない。³⁷⁾この事實は、『陽春白雪』が編まれ、陳振孫が『直齋書錄解題』を著した頃には、すでに現『草堂詩餘』にほぼ近い形の『草堂詩餘』が存在していたことを意味するかもしれない。

さて、この二種以外に前節末で言及した『復雅歌詞』にも、近人趙万里による輯本が存在する。³⁸⁾ 趙氏は『復雅歌詞』の原形について次のような見解を示す。

明刻『重校北西廂記』引李邴【調笑令】、云出『復雅歌詞』後集、知其書又分前後集。觀陳元靚『歲時広記』所引、知其体例与『本事曲子集』『古今詞話』及『本事詞』『詩詞記事』（俱引見『歲時広記』）相類似、同可視為最古之『詞林記事』。³⁹⁾

明刻『重校北西廂記』引く李邴【調笑令】は、『復雅歌詞』後集に出ると云い、其の書の又た前後集に分かたるるを知る。陳元靚『歲時広記』に引く所を觀るに、其の体例の『本事曲子集』『古今詞話』及び『本事詞』『詩詞記事』（俱に『歲時広記』に引見す）と相い類似するを知る、同に最古の『詞林記事』と視為すべし。

『復雅歌詞』は單なる選集ではなく、それぞれの作品に詞話を伴つたものであつたのではないか、という。しかも、この書物は黃昇が述べるように四千三百首もの作品を収めていた。その作品排列が具体的にどのようなものであつたのか（人物本位か、分類か）についてはわからないが、「詞話を伴う」といふ点からすれば、一種網羅的な側面の強い『草堂詩餘』に類した選集を想像すればよいかも知れない。

『類分樂章』『群公詩余』については、『復雅歌詞』のように手掛かりとなりうる断片すら残っていないため、その姿については何も分らないといふしかない。ただその名称から、前者は『草堂詩餘』のような分類編次（『草堂詩餘』の正名は『類選羣英草堂詩餘』）、後者は『花庵詞選』と類似した人物本位の、それぞれ体裁を採る選集であつたのではないかと推測される。

また、『直齋書錄解題』には著録されないが、南宋末の詞選集で重要なものに周密（一二三二～一二九八）の『絕妙好詞』がある。^⑩ 全七卷、張孝祥に始まり仇遠に終わる南宋詞人およそ百三十家、約四百首の作品を収録している。これは非常に早くに一旦伝が途絶えるのだが、清朝期に入ってから「再発見」され、査為仁・厲鶚による箋註本『絕妙好詞箋』の形で広く行われるようになった。序跋等が無い代わりに、張炎『詞源』『雜論』の中に次のような記述が残っている。^⑪

近代詞人用巧者多。如『陽春白雪』集、如『絕妙詞選』、亦自可觀。但所取不精一、豈若周草窓所選『絕妙好詞』之為精粹。惜此板不存、恐墨本亦有好事者藏之。

近代の詞人は巧を用いる者多し。『陽春白雪』の集の如き、『絕妙詞選』の如きは、亦た自ずから觀るべし。但だ取る所は精一ならず、豈に周草窓（周密の号）選ぶ所の『絕妙好詞』の精粹と為すに若かんや。惜しむらくは此の板存せず、恐らくは墨本も亦た好事の者の之を藏す有らん。

ここでは、『陽春白雪』や『絕妙詞選』（『花庵詞選』のこと）と比較して、『絕妙好詞』は近代（南宋末から元初を指すだろう）詞人の優れた作品を多く収録すること、その版木がすでに失われ、墨本も好事家によつて秘藏されるだけであることが述べられる。^⑫ この『絕妙好詞』と『草堂詩餘』との間には、作品の重複が極めて少ない。^⑬

現『草堂詩餘』の来源がどこにあるのかという問題に対しては、結局のところ現存資料からはわからないというしかない。ただ、『草堂詩餘』のテキストがどれほど別集と異なっていたとしても、それはなんらかの文字化され

た資料から引き写されたものである、ということは動くまい。『草堂詩餘』が『花庵詞選』というテキスト系統を共有する資料を持つこと、范開の序文が示唆するように当時詞のテキスト伝承は書面によってなされるものとの認識があつたことは、その有力な傍証となるだろう。そして、中田勇次郎氏が『草堂詩餘』の元・至正十一年刊本に「建安古梅何士信君実編選」の一行があり、『花庵詞選』の編者黄昇や『詳註周美成詞片玉集』の校正者蔡慶之といつた『草堂詩餘』に関係の深い人物がいずれも建安の人であることから、『草堂詩餘』の編纂は「建安と極めて密接な関係にある」と述べておられることを参考にすれば、その文字化された資料とは、現存しないがやはり建安という地域で編纂された「詞選集」であつた可能性が、恐らくもつとも高いのである。^{④⑤}

注

- ① 王楙『野客叢書』の最初の自序は慶元元年（一一九五）に記されているが、その後の加筆を経て嘉泰二年に再び自序が書かれている。『草堂詩餘』への言及が見えるのは第二十四卷であり、ここでは張仲宗『滿江紅』に附された註についての考証が行われている。ただし、この張仲宗詞は現存する最古の『草堂詩餘』刊本には見えず、却つて明・顧從敬刊本（顧氏は家蔵の宋本を参照したという）に収録される。

- ② 中田勇次郎「『草堂詩餘』版本の研究」（『大谷大学研究年報』第四号、一九五一年。後に『読詞叢考』（創文社、一九九八年）所収）参照。

- ③ 中田氏は前掲論文に於いて、一二〇〇年頃に存在していた『草堂詩餘』の祖本は一旦断絶、その後、別に註釈や詞話のついた詞選集が行われて、一二五〇年頃に現『草堂詩餘』のもととなる刊本ができたのではないかと考察している。また氏は、『直齋

書録解題』の著録する『草堂詩餘』二卷」がその祖本ではないかと述べる。

- ④ 拙稿『草堂詩餘』の類書性格について（『風絮』第三号、二〇〇七年）、「草堂詩餘」と書会（『日本中国学会報』第五十九集、二〇〇七年）、「草堂詩餘」と柳永（『橄欖』第十五号、二〇〇八年）。

- ⑤ 辛棄疾の生涯についての考証は、鄧広銘『辛稼軒年譜』（上海古籍出版社、初版は一九四七年。筆者は一九九七年増訂本を参照した）が最も精密で詳細とされる。また、最近発表された研究成果としては、村上哲見『宋詞研究―南宋篇』第二章「辛稼軒詞論」がある。
- ⑥ 宋代の多作な詞人には、他に蘇軾・劉克莊・吳文英等がいるが、彼らの現存する全作品数は三百五十首程度であり、辛棄疾の約半分である。

- ⑦ 『直齋書録解題』卷二一「稼軒詞四卷」の項参照。

- ⑧ 辛棄疾別集の刊本については、饒宗頤『詞集考』（中華書局、一九九二年）を参照。『稼軒詞』系統の主なものとしては、現在汲古閣旧藏影宋鈔本（後に涵芬樓藏）、明・呉訥『百家詞』本、及び本稿が底本とした陶湘涉園景宋本の三種がある。後二者については、その基づくところは汲古閣影宋鈔本とされ、『百家詞』本には四巻全てが有るが、陶湘本は丁巻を欠く。『長短句』系統には黃丕烈旧藏の元大徳己亥広信書院刊本がある。陶湘涉園景印の小草齋鈔本は、その広信書院本を影写したものという。

- ⑨ 『長短句』は本詞の詞牌名を【木蘭花】とする。

- ⑩ 『長短句』は本詞の題を「江行簡楊濟翁周顯先」に作る。

- ⑪ 周邦彦詞の註釈本である陳元龍集註『詳註周美成詞片玉集』と『草堂詩餘』の継承関係と、蘇軾詞の注に傳幹『注坡詞』を襲ったものがあることは、中田氏が前掲論文の中で既に指摘する。また周邦彦詞の註に関する問題については、前註④所掲の拙稿『草堂詩餘』の類書性格について」においても考察している。

- ⑫ 元来『草堂詩餘』には句間に註が挿入されるが、煩瑣になるため省略する。なお、本稿において『草堂詩餘』を引用する際、

底本とするのは洪武二十五年刊本である。

- ⑬ 【摸魚兒】は実は強い諷諭性が託された詞であり、その意味では「春晚」という小題は本来の意図と内容を反映出来てはいない。ただし、表面的には特に前関部分で晩春の風物描写が行われており、「春晚（春の終わり）」と題が附けられることに不自然はない。

- ⑭ 明・汲古閣『詞苑英華』本『花庵詞選』に附された毛晋の跋文に「蓋可作詞史云（蓋し詞史と作すべし）」とあるほか、同刊本の顧起綸による跋では『花庵詞選』を「詞家菁英尽於是乎（詞家の菁英是に尽きたり）」と絶賛する。また、『四庫全書總目提要』は「非草堂詩餘之類參雜俗格者可比。又每人名之下各注字号里貫、每篇題之下亦間附評語、俱足以資考核（草堂詩餘の類の俗格を參雜する者は比すべきに非ず。又た每人名の下に各おの字号里貫を注し、每篇題の下に亦た間ま評語を附す、俱に以つて考核に資するに足る）」と述べて、『花庵詞選』に対する信頼を表明している。

- ⑮ 人物本位の詩集としては、宋代以前には『河岳英靈集』『國秀集』『中興間氣集』『才調集』等がある。また宋代に入ってから、王安石の『唐百家詩選』、洪邁『万首唐人絶句』といった諸選集が、人物本位に編まれている。

- ⑯ 『古文苑』には宋・章樵が註を施しており、彼は作者によつては史書等から伝を引く。また、人物本位の選集ではないが『文選』にも、註の形で作者の情報記される。

- ⑰ 例えば『草堂詩餘』の冒頭を飾る周邦彦【瑞龍吟】には「花庵詞」と白抜きで表示された後に分段の箇所についての議論が附され、後集巻上に収録される僧仲殊【訴衷情近】には「玉林詞選云」として仲殊の詞風についての評語が附されている。これらは、いずれも『唐宋諸賢絶妙詞選』の中で黄昇がそれぞれの作品に附したものと一致する。

- ⑱ 『花庵詞選』が辛棄疾と同数の詞を収録する劉克莊の全作品数は、前註⑥で述べたようにおよそ三百五十余首と辛棄疾の約半分である。ちなみに、蘇軾詞は三十一首、吳文英詞は九首が収録される。

- ⑲ 『花庵詞選』の刊本は『唐宋諸賢絶妙詞選』『中興以来絶妙詞選』とで別々に刻され流布していたらしい。現存する刊本で二種

が合刻されるのは明末毛晋の汲古閣『詞苑英華』本が最も早い。本稿が参照した『四部叢刊』本は、前者は万曆四年（一五七六）舒伯明翻宋刻本、後者は無錫孫子小湊天祚明翻宋刻本である。

⑳ なお、明代嘉靖年間の記録になるが、晁瑛及びその子東吳の蔵書録である『晁氏宝文堂書目』『樂府』の条には、『稼軒余興』という書物名が見える。その名から辛棄疾の集と考えられるが、この書目以外には全く見られないものであるため、それが別集なのか個人の選集なのかは元より、具体的にどのようなものであったのかについては何も分からない。

㉑ 『草堂詩餘』は張元幹の詞を四首、『花庵詞選』は十三首収録する。そのうち、共通するのは『滿江紅』『石州慢』『蘭陵王（卷珠箔）』の三首である。

㉒ 『宋史』『芸文志』にも『蘆川詞二卷』が著録される。『蘆川詞』の刊本で今に伝わる主なものとしては、明・呉訥『百家詞』本、明・毛晋『宋六十名家詞』本、吳昌綬双照樓景宋本がある。ここでは、最後に挙げた景宋本『蘆川詞』を底本として用いた。

㉓ 異同を列挙しておく。小題「初春感旧」（草・花）、別集には無し。前闕末句「怕黄昏時節」（草）「怕昏黃時節」（花）「是愁來時節」（蘆）、後闕十句目「到得再相逢」（草・花）「到得却相逢」（蘆）。

㉔ 劉克莊には彼の門人林秀発の編纂にかかるという別集『後村居士集』五十巻があり、その詞は一九・二〇の二巻に収められている。この二巻については宋刻が残っており、陶湘がそれを『宋金元明本詞』の中の一つとして収録している。本稿のテキストはこれに拠った。別に、呉訥『百家詞』本や汲古閣刻『後村別調』といったテキストがあるほか、彼の詩文集である『後村大全集』（『四部叢刊』所収）も一八七～一九一の五巻に詞を収める。

㉕ 前註④所掲拙稿『草堂詩餘』と柳永参照。

㉖ 例えば明・楊慎は周邦彦【瑞龍吟（章台路）】「愴愴坊曲人家」の句について考証する中で、「近刻草堂詩餘、改作坊陌、非也（近刻の草堂詩餘、改めて坊陌に作るは、非なり）」という（『詞品』巻二）。また、『草堂詩餘』とは明言しないが、秦觀【滿庭芳】冒頭「山

抹微雲、天粘衰草」について「今本改粘作連、非也（今本粘を改めて連に作るは、非なり）」といい（『詞品』卷三）、『草堂詩餘』『花庵詞選』はこの句を「天連衰草」と作る。さらに、清代の宋翔鳳は『樂府余論』の中で「草堂一集、……其中詞語、間与集本不同。其不同者、恒平俗、亦以便歌。以文人觀之、適当一笑、而當時歌伎、則必需此也（草堂一集、……其の中の詞語は、間ま集本と同じからず。其の同じからざる者は、恒に平俗にして、亦た以つて歌うに便なり。文人を以て之を觀れば、適に當に一笑すべくも、而れども當時の歌伎は、則ち必ず此れを需むるなり）」と述べる。

- ②⑦ 序文後半は以下の通り。「然其盛麗如游金張之堂、妖冶如攬嬋施之祛、悲壯如三閭、豪俊如五陵。花前月底、舉盃清唱、合以紫簫、節以紅牙、麗麗然作騎鶴揚州之想。信可樂也。親友劉誠甫謀榮諸梓、伝之好事者。此意善矣。又錄余旧作數十首、附於後。不無珠玉在側之愧、有愛我者、其為刪之。淳祐已酉百五。玉林（然るに其の盛麗なること金張の堂に遊ぶが如く、妖冶なること嬋施の祛を攬るが如く、悲壯なること三閭の如く、豪俊なること五陵のごとし。花前月底、盃を舉げて清唱し、合するに紫簫を以てし、節するに紅牙を以てすれば、麗麗然として騎鶴揚州の想を作す。信に樂しかるべきなり。親友劉誠甫諸を梓に榮し、之を好事の者に伝えんと謀る。此の意たるや善し。又た余の旧作数十首を録して、後に附す。珠玉側に在るの愧無きにあらず、我を愛する者有れば、其れ為に之を刪れ。淳祐已酉百五。玉林）。この部分では、詞の効能及び刊行の経緯、卷末に自作を載せたことについて述べる。

- ②⑧ 中田氏は前掲論文の中で『復雅歌詞』について、「絶妙詞選の序にこの書の名が掲げられているのは、その編集に当つてこの書が参考されたのであらうと思われる。絶妙詞選が草堂詩餘と共通する点が多いのは、あるいはその原型が復雅歌詞にあったことを示すのではないかという想像も許されてよいのではなからうか」と述べる。

- ②⑨ 吳熊和氏は「關於鯛陽居士『復雅歌詞序』（『吳熊和詞学論集』（杭州大学出版社、一九九九年）所収）の中で『復雅歌詞』……是宋代規模最大的一部詞的総集」と述べる。なお、この序文は宋・謝維新『古今合璧事類備要』外集卷二一が「復雅歌詞序略」

として載せるもので、その一部分は宋・祝穆『新編古今事文類輯』続集卷二四「歌曲源流」にも、『能改齋漫錄』からの引用として見える。呉熊和氏は序文中に「紹興壬戌（十一年、一一四二）」とあること、『能改齋漫錄』の成書が紹興二十四年（一一五五）頃であることから、『復雅歌詞』は紹興十一～二十四年に当たる十三年の間に編纂されたのではないかと推測する。

- ③〇 晏叔原「有樂府行於世、山谷為之序（樂府の世に行わるる有り、山谷之が為に序す）」、王通叟「有冠柳集（冠柳集有り）」、毛沢民「有東堂集十卷（東堂集十卷有り）」、万俟雅言「有大声集五卷、周美成為序（大声集五卷有り、周美成序を為す）」、徐幹臣「有青山樂府一卷行於世、然多雜周詞（青山樂府一卷の世に行わるる有り、然れども多く周（邦彦）詞を雜う）」、康伯可「書市刊本皆假託其名、今得官本、乃其婿趙善貢及其友陶安世所校定（書市刊本は皆な其の名を假託す、今官本を得たり、乃ち其の婿趙善貢及び其の友陶安世の校定する所なり）」、劉叔擬「吉州刊本多遺落、今以家藏善本選集（吉州刊本は遺落多し、今家藏の善本を以て選り集む）」、吳子和「有詞五卷、鄭國輔序之（詞五卷有り、鄭國輔之に序す）」といった数則が確認される。

- ③① 『宋史』「芸文志」には『辛棄疾長短句』十二卷、『易安詞』六卷をはじめとする詞の別集が、数種著録されている。

- ③② 『文献通考』卷二四六参照。この部分は、書名の後に「陳氏曰」として『直齋書錄解題』に見える陳振孫の解題が引用されるだけの場合がほとんどである。ただし、『樂府雅詞』の項目には陳振孫解題の後に曾慥の自序が引かれるなど、例外もある。

- ③③ その情況は、明代の書目まで調査範囲を拡げてもあまり変わらない。著録される詞選集に限定するならば、むしろ種類は減少し、例えば『復雅歌詞』の名は見えなくなる。

- ③④ 『文献通考』は『樂府雅詞』の巻数を「十二卷」とする。

- ③⑤ 引用は『四部叢刊』所収の影鮑濠飲校鈔圈点本を用いた。

- ③⑥ この『陽春白雪』が著録されていることからすれば、『直齋書錄解題』が編まれた時期も或いは一二五〇年前後と同定できるかも知れない。陳振孫の生没年は不詳だが、この頃まで生きていた可能性は十分にあるだろう。ただし、それは現行の『陽春白雪』

と『直齋書録解題』の著録する『陽春白雪』が同じものであることが前提となる。現行『陽春白雪』が八巻本であることを考えると、それについてはなお疑問が残るだろう。

③⑦ なお、中田氏は前掲論文の中で『草堂詩餘』と『陽春白雪』の関係を論じており、「要するに、陽春から見た草堂の祖本の姿は、洪武本の添増の詞を取り除いたものの中に彷彿されるといっても、ほぼ差し支えはないであろう」と述べる。

③⑧ 趙万里『校輯宋金元人詞』所収。ここでは『詞話叢編』所収のテキストを参照した。全十則のうち、『歳時広記』からの収録が六則で最も多数を占め、残りは『花草粹編』からが二則、『類編草堂詩餘』と『重校北西廂記』からがそれぞれ一則ずつとなっている。

③⑨ 趙万里「復雅歌詞輯本題記」（『校輯宋金元人詞』）。

④⑩ 『直齋書録解題』は瑞平年間（一二三四～一二三六）から、遅くとも淳祐十年（一二五〇）頃には成立していた蔵書録と考えられるため、一二三二年生まれの周密が編んだ『絶妙好詞』が収録されていないのは当然といえよう。

④⑪ 張炎は南宋・淳祐八年（一二四八）に生まれ、元朝に入ってから一三二〇年頃に没したとされる人物。『詞源』は彼の晩年の著で、巻末には銭良祐による跋文が附されている。跋文中で銭は「乙卯歳玉田来寓钱塘县学舍（乙卯の歳、玉田来たりて钱塘県の学舍に寓す）」という。玉田は張炎の号、「乙卯の歳」は元の延祐二年（一二一五）。

④⑫ 「惜此板不存、恐墨本亦有好事者蔵之」について、詞源研究会訳註『宋代の詞論—張炎『詞源』—』（二〇〇四年、中国書店）は、「残念ながらこの集は刊本になっておらず、おそらくは鈔本も好事家が手元に収蔵してしまっているのであろう」と訳し、註（八）「墨本」に「墨本」は主に拓本類を指して言う」と述べる。「此板不存、墨本亦…」というのだから、ここにいう「板」は版木、「墨本」は刊本を指すのではあるまいか。

④⑬ 史達祖【双双燕】【綺羅香】など、五首に満たず、また文字にも異同が存在する。

④④ 『詳註周美成詞片玉集』には、巻頭標題の下に「廬陵陳元龍少章集註、建安蔡慶之宗甫校正」と列記される。

④⑤ 註②所掲論文参照。

④⑥ 同じ福建でも泉州の人曾慥の編んだ『樂府雅詞』、山東出身の趙聞礼の編纂にかかる『陽春白雪』、そして恐らく杭州で出版されたであろう周密『絶妙好詞』（周密は晩年杭州に寓居し、張炎や王沂孫等と交友を結んだ。また、宋の遺民として故国の文献を多く収集したというから、『絶妙好詞』も恐らくその頃編まれたものであろう）の収録作品が『草堂詩餘』とほとんど重複しないこと、また重複する作品でも文字テキストにしばしば大きな異同が見られることは、中田氏の述べる『草堂詩餘』の地域性を補強するのではないだろうか。